論　文　ニダバ (*Nidaba*) 38(2009), 19-28

バルカニズム（バルカン言語連合現象）とブルガリア語の特徴

―形態統語的バルカニズムと定性表現（後置冠詞）の機能を中心として―

本城二郎

0．序論

バルカン半島の言語分布としては、４言語グループ、つまりバルカン・スラブ語グループを構成するブルガリア語（Bul.）とマケドニア語、ルーマニア語（Rom.）とアルバニア語（Alb.）、それに現代ギリシャ語（Gr.）がよく知られているが、それ以外にも、一部セルビア語南部方言やアルーマニア語なども加わるとされている。バルカニズムに関しては、上記４言語グループにおいて集中的かつ典型的に現れることが観察されている。具体的には、ｉ．後置（接辞）冠詞、ii．「欲する」起源の動詞・小詞による分析未来形、iii．欠如形式としての動詞不定形に対する従属節の代用、iv．前後倚辞の重複現象（、それにｖ．アオリスト・インペルフェクト・完了の保持や間接叙述形式の発生による過去時制体系の発達）の４つ（または５つ）の共有言語特徴がバルカニズムを構成すると考えられている。

本論では、スラブ語の中でも特異で、屈折の衰退による分析タイプへの移行が顕著なブルガリア語における形態統語的バルカニズム（ii～iv、ｖ）および後置冠詞の機能に焦点を当てることによって、ブルガリア語の特徴とタイプ変化の一端を明らかにすることを試みる。

1．形態統語的バルカニズム：バルカニズムの特徴と分布

バルカン諸語が共有する特異な言語現象としては、次の４つ（または５つ）の共有特徴の存在が広く知られている。

ｉ．名詞や形容詞等の限定語に付加される後置（接辞）冠詞	Bul./Rom./Alb.
ii．「欲する」を意味する動詞・小詞による分析的未来形	Bul./Rom./Alb./Gr.
iii．動詞の不定形の欠如による従属節の代用	Bul./Rom./Alb./Gr.
iv．（補語名詞・代名詞の）前後倚辞による重複現象	Bul./Rom./Alb./Gr.

（ｖ．過去時制の体系の発達※1）

以下に、各共有特徴ごとにバルカニズム現象の担い手言語の事例を併記し、当該現象の各言語における分布状況を具体例を通じて観察・分析する。

(1)（＝ｉ）後置冠詞とは定冠詞役割の接辞冠詞のことを指し、ブルガリア語（およびマ

ケドニア語）では限定修飾語があればそのうちの最前要素の語に、なければ名詞の語尾にそれぞれ接辞されるのに対して、ルーマニア語やアルバニア語では名詞要素のみに接辞される。他方、現代ギリシャ語では、（一部スカンジナビア諸語を除き）他の西欧語と同様、定冠詞役割の独立冠詞が用いられている。

Bul. добрят приятел/**dobrjat prijatel**（いい友達／親友）
добрата жена/**dobrata žena**（きれいな女性）

Rom. **prietenul (cel) bun** ☜※2 **-ul** は接辞定冠詞で **cel** は指示冠詞
fata (cea) frumoasă
（ルーマニア語には、限定される名詞の性・数・格により変化する接辞定冠詞：単数：男性・中性-l/-lea/-a, 女性-a；複数：男性-i, 女性・中性-le 以外にも、不定冠詞の他、限定される名詞の性・数・格により変化する指示冠詞：単数：男性・中性 cel, 女性 cea；複数：男性 cei, 女性・中性-cele、さらに後置属格名詞と被修飾名詞との間に挿入され前者が後者を修飾することを示す役割を担う所有冠詞：al も存在する）

Alb. **miku i mirë** ☜ **-u** は接辞定冠詞で **i** は形容定冠詞
vajza e bukur
（アルバニア語には、限定される名詞の性・数・格により変化する接辞定冠詞：単数：男性-i/-u, 女性-a/-ja；複数-(t) ë 以外にも、一部の形容詞・名詞属格・所有代名詞・関係代名詞・順序数詞に前置され、限定される名詞の性・数・格により変化する形容定冠詞：単数：i/e；複数：e/të も存在する）

Mod. Gr. **ο καλός (ο) φίλος / ο φίλος ο καλός**
☜ **ο** は前置定冠詞男性単数主格形
η καλή (η) γυναίκα / η γυναίκα η καλή
☜ **η** は前置定冠詞女性単数主格形
（現代ギリシャ語には、限定される名詞の性・数・格により変化する前置定冠詞：単数：男性 ο, 女性 η, 中性 τ ο；複数：男性・女性 ο ι, 中性 τ α のみが存在する）

(2)（＝ii）「欲する」を意味する動詞・小詞による分析的未来形とは後倚辞＋定動詞で表示される未来形を指し、その際定動詞に前置される後倚辞小詞がそれぞれ、ブルガリア語（マケドニア語）では**щe/šte**（助動詞**ща/šta** の小詞化３人称単数形）＜щe/šte＋дa/da（小詞化接続詞）（ќe/ke）、ルーマニア語では **o să**＜助動詞不変化形＋接続詞（＋接続法）、アルバニア語では **do të**＜助動詞 dua（望む・欲する）の不変化形＋助詞（＋接続法）、現代ギリシャ語では **θα**＜動詞 θέλω（欲する）＋小詞 να（～すること・するため）（＋直説法／接続法アオリスト形）となる。

Bul. Ще да пиша/Šte da piša. >Ще пиша/ Šte piša. (私は書きます。)

Rom. O să scriu.

Alb. Do të shkruaj/Do shkruaj.

Mod. Gr. θα γράφω. (< θέ να γράφω.)

(3) (＝iii) 動詞不定形の欠如による従属節の代用とは接続詞・小詞＋直説法／接続法のことを指し、その際従属節を導く接続詞・小詞がそれぞれ、ブルガリア語（およびマケドニア語）では**да/ da**、ルーマニア語では**să**、アルバニア語では**të**、現代ギリシャ語では**να**となる。

Bul. Искам да (на) пиша/Iskam da (na)piša. (私は書きたい。)

☜ 法助動詞искам/iskam＋小詞/da（＋直説法）で「～したい」を表わす。

Rom. Vreau să scriu.

☜ 動詞 a vrea＋să（＋接続法）で「～したい」を表わす。Cf. 上記②の未来形の文語形：a voi＋不定詞および口語形：o să＋接続法およびその他のバリアント：A avea（持つ）＋să（＋接続法）

Alb. Due **të** shkruej/shkruaj.

☜ 動詞 dua＋të（＋接続法）で「～したい」を表わす。Cf. 上記②の未来形：do（＋接続法）およびバリアント形：kam（持つ） me（～と共に）/kam për（～のために） të（＋不定詞の名詞的分析形）

Mod. Gr. θέλω **να** γράφω/γράφω.

☜ 動詞 θέλω＋ να（＋接続法）で「～したい」を表わす。Cf. 上記②の未来形：θα（＋直説法／接続法アオリスト形）

(4) (＝iv)（補語名詞・代名詞の）前後倚辞による重複現象とは、特に補語を強調する場合の代名詞による二重使用のことを指し、その際主に人称代名詞の短形が前後倚辞の位置を義務的に占めることになる。この現象は、一般的に動詞カテゴリーの３種：指示性・他動性・完了性に関与的と見なされる。

Bul. Dadoch **mu ja** knigata na Ivan. (私は<u>イヴァンに本を</u>あげた。)

Rom. **Îl** dă fratelui sau/lui o carte. (彼は<u>兄弟に</u>本をあげた。)

Alb. **Ia** dhashé librin Xhonit. (私は<u>ジョンに</u>本をあげた。)

Mod. Gr. **Tu** edosa tu Petru to vivlio. (私は<u>ペトロに</u>本をあげた。)

(5) (＝v) 過去時制の体系の発達とは、(自動詞および他動詞の) 完了形と結合する助動詞が‘habere (持つ)’タイプ（ルーマニア語／アルバニア語／現代ギリシャ語）であれ‘esse (ある)’タイプ（ブルガリア語／マケドニア語）であれ、(ラテン語起源のロマンス語やドイツ語に特徴的な) 自動詞文・受動文には‘esse’タイプの、他動詞文には‘habere’タイプの、それぞれ助動詞の使用が義務的となる能格性分布の不在を指す。

Bul. **Čel săm.** (Ich habe gelesen. 私は読んでしまった。)

Došel săm. (Ich bin gekommen. 私は来てしまった。)

Rom. **Am** văzut. (J'ai vu. 私は見てしまった。)

Am venit. (Je suis venu. 私は来てしまった。)

Alb. **Kam** fry(fryrë). (Ich habe geblasen. 私は息を吹きかけた。)

Kam shkue(shukuar). (Ich bin gegangen. 私は来てしまった。)

Mod. Gr. **Ἔχω** γράφε ι. (Ich habe geschrieben. 私は書き終えた。)

Ἔχω φύγε ι. (Ich bin weggegangen. 私は立去った。)

2．ブルガリア語における形態統語的バルカニズムの特徴

ブルガリア語には、バルカニズムの共有特徴以外にも、2つの個別特徴が顕著に観察されている。それらは、すべて間接的叙述を含む動詞時制体系の発達と多様化に相当し、共有特徴ｖ（過去時制の体系の発達）の文法化と平行的に発達した副次な現象と見なされる一方、それがトルコ語との長年にわたる言語接触に起因するとも考えられることから、一種の形態統語的バルカニズムの一特徴と見なされる。以下に、具体例の観察・分析を通じて、ブルガリア語における形態統語的バルカニズムの各特徴を検証する。

ブルガリア語のバルカニズム：ｉ＋ii＋iii＋iv（＋ｖ）＋個別特徴（vi＋vii）

vi．（古代教会スラブ語より）増加する動詞直説法の時制体系

vii．（推測や伝聞等の）話者の間接的叙述を表示する時制体系

(1)'後置冠詞は主軸名詞の性・数に一致した変化形を持ち、形容詞等の修飾語が前置する場合、最前置要素に接辞する。ただし、男性単数名詞の場合には、主格形と斜格形の区別がある。

Bul. **dobrjat prijatel**（いい友達／親友）／男性・単数／

bărzata reka.（流れの速い川）／女性・単数／

malkoto dete.（小さな子供）／中性・単数／

golemite gradove.（大きな町）／男性・複数／

bărzite reki.（流れの速い川）／女性・複数／

chubavite sela.（美しい村）／中性・複数／

Golemijat grad stoi v dolina.（大きな町が谷間に立っている。）／主格：主語／

Viždam golemija grad.（大きな町を私は見ている）／斜格：目的語／

(2)'「欲する」を意味する動詞・小詞による分析的未来形:

Bul. **Šte** četa.（私は読みます。） ☜ **šte**（助動詞 šta の小詞化３人称単数形）

＜šte＋da（小詞化接続詞）

Njama da četeš.（あなたは読まないでしょう。） ☜ 否定未来：動詞 **imam**（持つ）の否定形

(3)'動詞不定形の欠如による従属節の代用：

Bul. *Trjabva* da vzema.　（私は取る必要がある／ねばならない。）

☜ 不変化形容詞 trjabva（必要だ）＋小詞 da（＋直説法）

トルコ語との平行性（≒トルコ語：al-meli-yim<al（取る）-meli（必要だ）-yim（私は～だ）

Cf. 1. 痕跡不定形（＝2-3 人称単数アオリスト形）の一部残存：文語のみで稀

Ne *moga* pisa.（私は書けない<書くことが出来ない）

Ne *moga* da piša.　／da＋直説法の方が一般的／

Cf. 2. 本国のトルコ語 vs. トルコ語キュステンディル方言 vs. ブルガリア語：

Tur. Ye-mek *isti*-yorum.（私は食べたい。）vs.

K. Tur. *Iste*-yim ye-yim. vs.

Bul. *Iskam* da jam.

(4)'（補語名詞・代名詞の）前後倚辞による重複現象：

Bul. Čel sŭm ja knigata.（私は、その本を読み終えた。）

☜ 定直接目的語の二重使用による指示性・他動性・完了性の表示

vs. *Čel sŭm ja kniga. ☜ 否定未来

Bul. Na Ivan knigata sŭm mu ja vŭrnal.（私は、イヴァンにはその本を返した。）

☜ 文頭位置定目的語の二重使用によるテーマ性の表示

(5)' 過去時制の体系の発達：

Bul. Kupil săm kaštata.　（Ich habe das haus gekauft. 私は家を買ってしまった。）

☜ vii（話者の間接的叙述形）の例で、このような１人称主語の場合、「驚き・否定」の意味も表す。

Bul. Cjal den e učil.　（Den ganzen Tag hat er gelernt. 彼は一日中勉強していた。）

☜ 複合過去時制形の例で、このように（１人称主語を除く）３人称主語で助動詞 e/sa が共起する場合、英語完了と同じく「完了・完了継続」の意味を表す。

(6)（古代教会スラブ語より）増加する動詞直説法の時制体系：

Bul. Četa.（私は読む。）／現在／ Čete.（私は読んだ。）／アオリスト：完了／

↓　Četeše.（私は読んでいた。）／インペルフェクト：未完了／

Ště četa.（私は読むだろう。）／未来／

Štjal săm da četa.（私は読むだろうに。）／間接叙述の未来：１人称主語は「驚き」／

Ště săm (pro)čel.（私は読み終えているだろう。）／アオリスト未来完了／

Čel si.（君は読み終えている／～たらしい。）／アオリスト完了：完了の継続・間接叙述／

Četjal si.（君は読んでいるらしい。）／インペルフェクト完了：未完了の継続・間接叙述／

Bil si čel.（君は読み終えたらしい。）／アオリスト過去：間接叙述／

Beše (pro)čel. (彼は読んでいた／読み終えていた。) ／アオリスト過去完了／

Bich (pro)čel. (私は読む／読み終えるでしょう。) ／アオリスト条件法現在／

Štjal da (pro)četa. (私は読んでいたでしょう／読もうとしていた。)

／アオリスト条件法過去・過去未来／

Štjal săm da četa. (私は読んでいたらしい。) ／間接叙述のアオリスト条件法過去／

(7) (推測や伝聞等の) 話者の間接的叙述を表示する時制体系：

Bul. Toj napisal pismoto. (彼は一日中勉強していたらし。)

☜ vii (話者の間接的叙述表示の時制形) の例で、このように (1人称主語を除く) 3人称主語で助動詞 e/sa が省略される場合、「推測・伝聞」の意味を表す。

Cf. (5)' の後者の用例 (「完了・完了継続」)

3．スラブ語の定性表示類型とブルガリア語の特徴

スラブ語は、形態類型論的には、屈折タイプに属する北スラブ語 (中欧スラブ語：西スラブ語・東スラブ語) &南スラブ語北部グループ (スロベニア語・セルビアクロアチア語) および分析タイプに属するバルカン・スラブ語グループ (ブルガリア語・マケドニア語) の2種類に分類される。その一方、限定詞が表示する定性カテゴリーの有無・組合せによるタイプ分けも可能である。以下に、定性表示におけるスラブ語の可能な類型を抽出し、スラブ語の中でもとりわけ多様な定性表示子の体系を持つブルガリア語を対象に、後置冠詞・限定詞・代名詞の体系を概観し、バルカニズムの一特徴を検証する。

3．1．定性カテゴリーの有無・組合せによるスラブ語の類型

4つの定性表示子の有無・組合せに基づき、スラブ語は、3類型にタイプ分けされ、とくに冠詞の有無により、バルカン・スラブ語とそれ以外に大別可能である。

①文法的定性表示子(冠詞)：	+	−	−
②語彙的定性表示子(指示詞等)：	+	+	+
③統語的定性共表示子 A (述語動詞：存在動詞 vs. 属性動詞)：	+	+	+
④ B(語順：Th-Rh 語順)		+	
[ｽﾗﾌﾞ語]：	[ﾊﾞﾙｶﾝ・ｽﾗﾌﾞ語]	[中欧ｽﾗﾌﾞ語&南ｽﾗﾌﾞ語北部ｸﾞﾙｰﾌﾟ]	[東ｽﾗﾌﾞ語]

ブルガリア語に特有の個別類型的特徴としては、以下の組合せが挙げられる。

定性表示子共起の可能性：①／②＋②

定冠詞／指示詞と所有形容詞の共起が規則的な場合：

(8) Bul. mojata šapka (私の(その)帽子)、tazi moja šapka (私のこの帽子)

ただし、ブルガリア語は親族名詞への冠詞付加が大部分不可で、無標の所有与格が代用

(8)' Bul. majka mi (私の母)、tatko mi (私の父さん)、例外：măžăt ĭ (彼女の夫)

属性表示繋辞文の述語名詞句は (その非指示性から) 指示詞無しが原則

(9) Bul. Tja rodi dete. (彼女は子供を産んだ。)、Beše momiče. ((彼女は)女の子だった。)

3．2．ブルガリア語の（定性プロパー）後置冠詞および定性限定詞の体系

バルカニズムの典型例と見なされる後置冠詞は、定性プロパー表示子としてブルガリア語の文法体系の中心を構成する。以下に、後置冠詞と他の限定詞との相補分布を示すブルガリア語の定性限定詞の体系を概観する。

i．●後置冠詞：定名詞句の（副詞を除く）第一要素への接尾後置詞で、その語形は主軸名詞の性・数（男性単数名詞の場合、-t 付き主格と-t 無し目的格の対立において顕在化する格）に一致する。

単数：

名詞・形容詞が第一要素の場合：

－子音終わり男性名詞：-ăt/-jat(主格形) glupecăt(その愚か者)

-a/-ja(目的格形) stajata na profesora(その教授の部屋)

男性形容詞：novija(t)(その新しい)<nov(新しい)

－a 終わり男性名詞／女性名詞：-ta　　ženata(その女･妻)

女性形容詞：-ta　　novata<nova

－子音終わり女性名詞：-ta　　pesenta(その歌)

－o 終わり男性名詞／中性名詞：-to　　mjastoto(その場所)

中性形容詞：-to　　novoto<novo

複数：

名詞・形容詞が第一要素の場合：

－a 終わり複数名詞：-ta　　mestata(その場/複数/)

－i/－e 終わり複数名詞：-te　　ženite(その女･妻たち)

複数形容詞：-te　　novite

ii．●限定詞：定／不定名詞句の第一要素に前置され、指示／不定代名詞と所有形容詞と不定冠詞（数詞）に下位分類され、語形は名詞の性・数に一致する。

●指示代名詞：

男性形：tozi/toja(この･その)　onzi/onja(あの)　takav(そのような)

女性形：tazi/taja　onazi/onaja　takava

中性形：tova/tuji(この･その･これ･それ) onova/onuj(あの･あれ) takova

複数形：tezi/tija(これらの･それらの)　onezi/onija(あれらの) takiva

Tova sa moite novi drexi.(これは私の新しいﾄﾞﾚｽ/複数/です。)

☜ 繋辞動詞の主語は常に中性単数形で動詞は述語補語と一致

●所有形容詞：

単数：１人称形：moj(私の)、２人称形：tvoj(君の)、

３人称形：男／中性指示：negov(彼の･それの)女性指示：nein(彼女の)

複数：１人称形：naš(我々の)、２人称形：vaš(君たちの･貴方たちの)

３人称形：texen(彼ら/彼女ら/それらの)、自称形：svoj(自身の)

Az vzex svojata kniga.(私は自分の本を取った。)≒Az vzex kniga si.

mojata　　(私が取ったのは自分の本だ。)

iii. ●３人称代名詞：単一独立前方照応詞で、その語形は先行名詞の性・数に一致する。

toj(彼・それ/男性単数/) to(それ/中性単数/) tja(彼女・それ/女性単数/)

te(彼ら・彼女ら・それら/複数/)

(ne)go//mu(彼・それを//～に) (ne)ja//i(彼女を//～に)

tjax/gi//im(彼らを//～に/複数/)

Dadox nego na neja.(私はそれを彼女にやった。)

Dadox i go.(私は彼女にそれをやった。)

iv. ●名詞句要素の無標語順：

[指示代名詞]	[所有形容詞]	[数量限定詞]		[形容詞]	[名詞]	[前置詞句]
tezi	moi	dve	(mnogo)	skapi novi	knigi	ot Germanija
(この	私の	２つの	とても	高価な 新しい	本	ドイツから)

４．ブルガリア語における定性表現の形式（文法）構造分析

定性表現（／名詞句）とは、話し手の頭の中にありかつ話し相手にとり既知であるような情報のことをいう。既知情報は、３つの語用論的前提の一つ、つまり前方照応と直示と共有知識により成立する。とりわけ、非人称文における前方照応語の表示は、バルカン・スラブ語（およびセルビア・クロアチア語）では一般的で、他のスラブ語には例がなく、統語的バルカニズムの一種と見なされている。

(10)Bul. Tova mi e jasno/Jasno mi e.（私には明らかだ。）

Tova beše li chubavo?/Beše li chubavo?（大丈夫かい?）

５．ブルガリア語における定性表現の機能構造分析

通言語的には、(統語的意味を表示する結合価とともに）文脈条件を表示する定性／不定性と発話文のTh-Rh構成を表示するＦＳＰ※3（機能的文構成）は、後者が前（２）者の修正原理であるという付帯条件下、それぞれ言語の主要な３構成原理のうちの２つと見なされる。その際、支配的原理の種類と他の原理との組み合わせにより、言語のタイプ分けが可能であることから、ＦＳＰ機能類型論の考え方が発達し、その結果、その理論的有効性により、現在に至まで個別言語および言語グループの特徴づけの分野（＝言語性格学）において多くの生産的知見を産み出している。この考え方に従うと、スラブ語は典型的なＦＳＰ支配タイプに属し、階層的上位にあるＦＳＰが（、カテゴリーの担い手となりえない点で副次的構成原理と見なされる語順を含む）他の主要原理、特に定性／不定性に対して、最大の修正原理となる傾向があることが大きな特徴である。

汎スラブ語的傾向：

不定Th主語名詞句つまり［Th・文頭・可算具象・φ限定詞名詞句］の定性付与

バルカン・スラブでは、特に詩・諺・格言で、単純非Rh主語名詞句が冠詞や限定詞なしで文頭に置かれる場合がある。この φ 限定詞名詞句は、通例の限定詞付き主語のバリアントではあるが、ブルガリア語に特徴的な／φ 形態素表示による[対象存在] ／vs.／冠詞表示による[対象存在前提]／の対立により、無標と解釈されることになる。

(11)Bul. Cigular kăšta na chrani.

(バイオリン弾きは、家を養わない。＝〔諺〕ころがる石には苔が生えない。)

これに対して、Rh名詞句は、最初の提示以後は定性限定詞の付加が義務的であるという条件つきながら、不定性vs.定性の対立の点でも、ともに可能つまり無標解釈となる。

(12)Bul. Njakoj[i] počuka na vratata. Sled malko tozi njakoj[i] vleze. (Tova[i]) Beše razdavačăt.

(誰かが扉を叩いた。すぐ後に、この誰かが入ってきた。郵便配達人だった。)

[解釈] Njakoj[i]=tozi njakoj[i]=(Tova[i])

Cf.Bul. Njakoj[i]... Sled malko njakoj[j] vleze. (Tova[j]) ...

(...。すぐ後に、誰かが入ってきた。...。) [解釈] Njakoj[i]=njakoj[j]=(Tova[j])

バルカン・スラブ語の前倚辞重複現象※4：

ブルガリア語（特に口語）では、目的語が（文頭位置の）Rh要素である場合、重複前倚辞の文第２位置（つまりWackernagelの位置）が義務的となる。語順や文強勢によるレーマ化が文法化されていないバルカン・スラブ語（特にブルガリア語）でにおいては、形式主語構文（tova e ～）による分裂文が未発達で、それに代わる文法形式つまり擬似分裂文として文法化されているのがこの前倚辞重複現象である。この文法化現象が形式主語や分裂文（さらには人称文）を高度に発達させた西欧諸言語と同じく、他のスラブ語に較べ、ブルガリア語において顕著な現象であることは、後置冠詞の発達とともに、分析タイプへの移行を表示するバルカニズムの特徴の一つと見なすことができる。

(13)Bul. Kazax novinite na Ivan. (私は、ｲｳﾞｧﾝにそのﾆｭｰｽを知らせた。) ／無標／

↓／擬似分裂文による目的語のレーマ化・有標化／

Na IVAN mu kazax novinite. (私がそのﾆｭｰｽを知らせたのは、ｲｳﾞｧﾝ(に)だ。)

NOVINITE gi kazax na Ivan. (私がｲｳﾞｧﾝに知らせたのは、そのﾆｭｰｽだ。)

(注) ※1 Kurzová(1995)において提起されたバルカニズム現象の追加事象で、未だ通説には至っていないものの、それが分析タイプの発生へと導く文法化プロセスと見なされている。そこでは、さらに文法性の体系も共有特徴と見なされている。

※2 ☜記号は、観察・分析結果を示す。以下、これに従う。

※3 FSP(機能的文構成)とは、文要素が文中で果たす伝達機能(FSP 機能)に応じて配列される文構成を意味し、無標ではTh(ﾃｰﾏ)-Tr(移行)-Rh(ﾚｰﾏ)語順を基本配列とする。文の機能的構成の中心をなすのは、定動詞の TME(法・時制ｶﾃｺﾞﾘｰ表示子)要素で、それが固有に担うTrPr(移行ﾌﾟﾛﾊﾟｰ：仲介・連結)役割を通じて、文全

体は言語外現実と結びつき現実発話となる。他方、文内の機能的構成の中心を成すのは、定動詞の概念内容部分で、それが担う Tr(移行)役割を通じて、文内部は要素の機能的結束(Th-Rh ﾈｸｻｽ)を可能にする。

FSP 基本配列:述語動詞文:ThPr-(ThPro-)Th-DTh-TrPr-(TrPro-)Tr-Rh-RhPr

※4 1．の共有特徴ⅳおよび2．の(4)'を参照。

6．結論

ブルガリア語における形態統語的バルカニズムの対照構造分析と定性表現の機能構造分析により、次の傾向的特徴が抽出された。

ⅰ．ブルガリア語は、バルカン諸語の4つの共有特徴（後置接辞冠詞、「欲する」を意味する小詞化助動詞 šte による分析的未来形、動詞の不定形の欠如による da-従属節の代用、前後倚辞による重複現象）に加え、（伝聞・推定等の）動詞時制体系の拡大その他の現象により、（古代教会スラブ語時代の屈折タイプから）分析タイプへの移行を実現しつつある。

ⅱ．ブルガリア語は、特に目的語名詞句に対する重複現象の義務化（あるいは文法化）により、（その結果派生する名詞句の限定性・特殊性を通じて）節文全体の指示性・他動性・完了性の表示が実現されつつある。

ⅲ．後置冠詞と限定詞との併用により、名詞句の定性表現が語順から開放された結果、有標 Rh-Th 語順や重複現象に代表されるような擬似分裂文が許容されつつある。

参考文献：

Běličová, H. et al.(1996): *Slovanská věta* (*Slavic Sentence*), Euroslavica:Praha.

Comrie, B. et al.(1993): *The Slavonic Languages*, Routledge:London.

Erhart, A.(1982): *Indo-evropské jazyky* (*Indo-European Languages*), Academia:Praha.

本城 二郎 2006:「スラブ語の定性表現の機能構造」, *NIDABA* No.35.

本城 二郎 2006:「バルカニズム（バルカン言語連合現象）とブルガリア語のタイプ」, *言語文化学会第20回大会提出ハンドアウト*.

Horálek, K.(1962): *Úvod do studia slovanských jazyků* (*Introduction to the Study of Slavic Languages*), SPN:Praha.

Kontaktlinguistik (*Contact Linguistics*) Vol.2 edited by Hugo Steger et al., Walter de Gruyter:Berlin, 1997.

Kurzová, H.(1995): "Gramatikalizační procesy v balkánských jazycích", *Studia Balkanica Bohemo-Slovaca* Ⅳ, Masarykova Univerzita:Brno.

Svoboda, A.(1989): *Kapitoly z funkční syntaxe* (*Chapters from Functional Syntax*), SPN:Praha.